

第13章 北米インディアンの英語化と 民族アイデンティティの問題

—— カイオワ族の事例 ——

高橋 順 一

1. 問 題

言語は話者の意識と密接な関係にあると考えられており、しばしば民族アイデンティティの強力なシンボルとなる。19世紀に中規模の国民国家形成を達成した西ヨーロッパ諸国や日本では、標準化された国語の普及が、共通の民族アイデンティティの強化にとって重要な意味をもち、新しい「国民」の形成に大きな役割を果たした。そのような社会では、近代における国民国家形成の過程で出来上がった「国語」をあたかも所与のものと考え、国家・国民と国語は不可分のものであるかのように考える言語観が顕著に見られる。そのため、いわゆる外来語の多用や外国語の語句や発音の混入は国語の破壊につながり民族意識や伝統文化の崩壊を導くということが、これまで繰り返して主張されてきた。

しかし、言語と民族アイデンティティとの関係は複雑な問題であり、必ずしも単純に直線的に結びつくものではない。まず第一に、「民族」という語は非常に多義的であり、小規模のバンド社会から米国や旧ソ連のような巨大国家まで、様々なレベルの集団に言及することがある。また、多くの社会において同一個人が同時に複数の帰属集団を持っており、実際にどの集団への帰属が最も重要になるかは状況によって変化しうる。そして同一個人が複数レベルの集団アイデンティティを持つ重層的なアイデンティティが、ごく普通のこととして見られるのである。もし特定レベルの民族的アイデンティティが突出して強調されるとしたら、そこには何か特別の政治的理由があることになる。

言語もまた同様の複雑な問題をはらむ。言語とはひとつの社会（言語共同体）の中で一様のものではなく、階級方言や地理的方言等いくつもの下位的変種（バラエティー）の集合となっている。現実的に全く均一でただ一つの言語やバラエティーのみで機能できる言語共同体はほとんど無く、複数の言語やそれらの下位バラエティーが複雑なコード選択とコード使用規則の下に機能的に組み合わされ一体化して成り立っているのが普通である（Gumperz 1962; Hymes 1972）。ある程度の人口規模を持つ国家や民族のアイデンティティと結びつく言語は、慣用的な共通語であれ、政治的に指定された公用語であれ、標準語であれ、複雑な社会的・政治的・歴史的過程の産物であり、単純な自然発生的なものでは決してない。

筆者は、言語と民族アイデンティティの間には密接な関係が存在するが、それは言語が本

来的に民族の精神やその伝統と結びついているからではなく、特定の社会政治的条件下で、状況的かつ機能的に結びつくからなのだと考えている。したがって、言語と民族との関係を所与のものであり不可分のものであるという主張は、多分に政治的な意図を含んだものであって、客観的な事実に立脚した科学的なものではないと言わざるをえない。

そのような考えに立脚し、本稿では北米先住民部族の一つであるカイオワの言語共同体をとりあげ、その英語化にいたる過去3世紀の歴史を概括的にたどりながら、その言語的レバートリーと民族アイデンティティーとの関係を考察してみる。カイオワは小規模な部族社会であるが、規模は小さくともその言語共同体としての構成は複雑であり、決して均一ではない。また先住民の言語から外来支配者の言語である英語への移行も、決して受動的な同化の結果ではなく、民族アイデンティティーの希薄化や崩壊をもたらした原因でもないということが示されるはずである。同時に、言語は民族アイデンティティーの根幹をなすという言説自体、必ずしも普遍性を持ったものではないことが示唆されるであろう。

2. カイオワとその言語

カイオワ族 (Kiowa) は、典型的な北米大平原文化圏 (青木 1979 参照) に属するインディアン部族であり、現在オクラホマ州南西部を中心に約 4,500 人が住んでいる。部族の保護地はなく、アングロ (ヨーロッパ系アメリカ人の総称)、黒人 (アフリカ系アメリカ人)、及び他のインディアン諸部族 (カイオワ・アパッチ、コマンチ、カド、ウィチタ、等) の人々と雑居となっており、他人種および他のインディアン諸部族との混血も非常に多い。

カイオワの言語は、20 世紀初頭に言語学者 Harrington (1928) によって最初に記述されて以来、Trager (1960)、Watkins (1980)、Takahashi (1984) 等の研究者によって文法の解明が試みられてきた。カイオワ語は、言語類型的にはアツテク・タノ語族のタノ語群諸語と類似した特徴を有しているため、カイオワ・タノ語派として分類されており、共通祖語の復元も試みられている (例えば、Hale 1967)。しかし同時に孤立した特徴も多くそなえており、タノ語群諸語がすべて南西文化圏の農耕民であるプエブロ諸部族によって話されているのに対し、北方起源の典型的な狩猟民であるカイオワ (カイオワは農耕の経験が全くない) がどのような形で歴史的に結びついていたのか、まだ謎に包まれてた部分が多い。

カイオワが初めて歴史に登場するのは 17 世紀後半である (Mayhall 1962)。当時彼らはロッキー山脈の東側、モンタナ州イエローストーン川源流付近の山岳地帯に住む狩猟採集民であった。しかし 18 世紀初頭には東に移動して北部大平原地帯に下り、さらに進んでダコタ州ブラックヒルズ周辺で暮らすようになった。しかし 18 世紀半ばには、スー族の膨張のために圧迫されて南下し、カンザス州からオクラホマ州およびテキサス州北部にかけての南部平原に活動の場所を移した。さらに 19 世紀末にはアメリカ合衆国の拡大によりオクラホマ州南西部の保護地に収容されるにいたった。その後保護地は分割開放されて私有地となり、今日に及んでいる。(Mayhall 1962) その過程で、カイオワは多くの民族多くの言語と交わり、それらと安定した継続的關係を維持してきた。それがカイオワの言語共同体にかなりの複雑性を与える

こととなった。

カイオワが過去3世紀余りの間にこのようにめまぐるしく生活の舞台を移動した最大の理由は、ヨーロッパ人の進出であり、その結果としての大平原文化圏の成立である。大平原地帯とは北米の中央部、テキサスからカナダ中央部まで南北に大きく広がった大草原地帯を指す。この広大な地域は降雨量が比較的少ないため森林はほとんど発達せず、一面丈の低い草におおわれている。そこを、バイソンを中心とする大型の草食動物が群をなして生息しており、季節毎に大規模な移動を繰り返していた。そのような広大な草原地帯は、馬という移動手段と効果的な金属器を持たない先住民諸部族にとって、生態学的に決して利用しやすい環境ではなかった。そのため人口密度は希薄であった。

ヨーロッパ人との接触は、インディアンに馬と金属製の道具（特に銃）をもたらした。馬はメキシコにやってきたスペイン人が、銃はカナダ東部にやってきたフランス人毛皮商人が供給した。強力な交通手段と武器・狩猟具を手に入れたインディアンの諸部族は、いっせいに大平原地帯に進出し、そこには馬の飼育とバイソンの狩猟を生業基盤とした新しい文化型（大平原型文化）が形成された。またそこには大平原の南西部から入ってくる馬と北東部から入ってくる銃を次々と交換していく長大な交易ルートが作られ、大平原に進出したインディアン諸部族は、交易仲介者の地位をめぐる、この交易ルートからはじき出されないよう激しい闘争を繰り返すことになったのである（Lewis 1942; Ewers 1980; Jablow 1955）。この大平原型文化は、インディアン諸部族が完全にアメリカ合衆国の軍事的支配の下に下る19世紀後半まで力強く継続するが、その後は急速に衰退する。本稿が対象とするカイオワの歴史は、この大平原文化の形成・成長と衰退の期間に対応している。

3. カイオワ言語共同体の推移

カイオワの社会は、17世紀末から19世紀末まで、人口は常に約1,500人程度と多くはなかった。しかし人口的に小規模であることが必ずしも民族的に均一であることを条件づけるわけではないし、その言語共同体が均一であることを意味するわけでもない。実際、様々な歴史的・民族誌的事実は、カイオワ社会が、その規模の小ささにもかかわらず、言語的にも民族構成的にも決して均一ではなく、かなり複雑であったことを示している。

(1) アパッチとの関係

史実から確認できる限り、カイオワは過去300年以上にわたってアパッチ（アパッチ語：ナダネー語族 / アサバスカン語派）の一集団と常に行動をともにしてきた。カイオワ・アパッチ（Kiowa-Apache）と呼ばれるこのグループは、文化的にはカイオワと区別が困難なほど類似した大平原型の特徴を示しており、政治的にもカイオワ族のバンドの一つとしてしっかり組み込まれていたが、言語的には常に独自性を維持し続けて今日にいたっている。カイオワとカイオワ・アパッチの間はひんばんな婚姻関係で結ばれており、相互の関係は非常に緊密である。そこでは当然二言語使用が必要であり、かなり恒常的に行われていたと推測される。人口比か

ら見てまた今日の民族誌的状况から見ても、二言語使用はカイオワ・アパッチの場合により顕著であったと思われるが、カイオワの側にもかなりの程度存在していたことは疑いない。

(2) サースとの関係

カイオワはまた早期には、アパッチと類似した言語を話すサーシ (Sarsi) とともに非常に親しい関係にあり、相互の婚姻関係も存在していた。サーシはアパッチの親類と考えられており、同様の親しみを抱かれていた。実際、カイオワの中には19世紀後半にいたるまでサーシの子孫だと自認する者がいた。この事実はまた、カイオワ言語共同体の中に別のバラエティーのアパッチ語話者が存在していたことを示唆している。

(3) クロウとの関係

カイオワは、17世紀末に北部平原地帯に進出し、クロウ族(クロウ語:マクロ・スー語族/スー語派)と接触する。カイオワより先に平原地帯に進出し、既に多くの馬を所有し典型的な大平原型の文化を発達させていたクロウは、カイオワを友好的に迎え、1700年頃にはクロウとカイオワの同盟関係が確立される。この関係は長期間安定して続き、今日もまだ維持されている。クロウは、馬や宗教的信仰をはじめとする多くの大平原文化の諸要素をカイオワに伝えた。そのためカイオワは、クロウに対しては常に尊敬の態度で接し、自らの子供たちを数年間クロウの下で育て、彼らの文化を学ばせたと言われている(Mooney 1979)。このような慣行は、カイオワ言語共同体の中にある程度のカイオワ・クロウ二言語使用を作り出したものと思われる。

(4) アリカラとの関係

クロウと同盟関係を結び、ブラックヒルズ周辺を占有するようになったカイオワは、そこで農耕民であるアリカラ族(アリカラ語:マクロ・スー語族/カド語派)と密接な関係を作り上げる。そして「アリカラ」の名を冠するバンドを擁するようになる。Mooney (1979)によると、この時期のカイオワ社会はクラン組織を全く持たずに、6つのバンドによって構成されていた。そのひとつとしてアリカラのバンドは、前述のアパッチとともに含まれていた。ここでいうバンドは部族の下位組織であり、それぞれにチーフを有し、異なった言語と宗教的儀礼を持っていたという。Mooneyの記述から見る限り、この時期のカイオワは単一の民族というより小規模ではあるが複数の民族の連合体のようである。6つのバンドのひとつにカイオワ本体を意味するバンド(Kaygwuと呼ばれた)が含まれていることも興味深い。また伝説によれば、カイオワ社会には異なる方言を話していたと言われるまたもうひとつのカイオワのバンドがあったが、北方時代に狩猟の成果の取り分をめぐる対立し分裂して消息を絶ててしまったという。

(5) コマンチとの関係

スー族の圧力によって南部平原に押し下げられたカイオワは、1790年頃にはコマンチ族(コマンチ語:アツテカ・タノ語族/ユート・アツテカ語派)と同盟を確立し、以後1世紀近くに渡って常にコマンチと行動を共にするようになる。部族間の婚姻も見られ、両者の関係は友好的かつ緊密なものであった。コマンチ語はまた南部平原地域におけるリング・フランカとしての役割をある程度担っていたので、多くのカイオワが多少のコマンチを理解するように

なつたと推測される。コマンチ語を多少理解できる者は、今日のカイオワの中にもかなりいる。またコマンチ語の他にも、北米インディアン独特の手話（American Indian Sign Language）が、大平原地帯一般に通用するリンガ・フランカとして異部族間の交渉に広く利用されていた。カイオワも手話を用いて、スーやシャイアン等の敵対的な諸部族との交渉を行っている。これもまたカイオワの言語的レパートリーのひとつとして無視できない。

（6）プエブロ諸部族との関係

南部平原においてカイオワは、しばしばニューメキシコのリオグランデ川流域のプエブロ諸部族と交易をしている。彼らはカイオワ語と歴史的関係にあると推測されているタノ諸語を話す民族であるが、両者の類縁関係は互に理解が可能なほど近くはないので、何らかの手段を用いて交渉を行ったはずであるが、それが何であったかは分かっていない。

（7）スペイン語との関係

南部平原でコマンチとの同盟を結んだ後、カイオワは盛んに南方のテキサスや北メキシコ地域への侵入を繰り返し、牧場から多くの馬を略奪するとともに、子供と女性を中心に相当数のスペイン系住民を拉致した。それらの捕虜たちは養子または妻としてカイオワ社会に組み込まれ、カイオワとして一生を送った。そのことは、カイオワ言語共同体の中に相当数のスペイン語を理解できる者が恒常的に供給されていたことを意味している。

このように、カイオワは、17世紀後半から19世紀前半にかけて2世紀の間、アパッチ語、クロウ語、アリカラ語、コマンチ語、そしてさらにスペイン語と言語系統を事にする複数の言語と密接で安定した関係を持ってきた。このことは、カイオワの言語共同体が決して均一で閉鎖的なものではなかったことを示している。むしろ異なる言語を話す多くの民族と積極的に交渉を持ち、同盟関係を作り、政治的連合体を作って、激しく変化する厳しい環境に対処し適応してきたことが伺える。均一で閉鎖的な集団を維持しては、北部の山岳地帯から南部平原まで移動しながら生き延びていくことは困難であったかもしれない。乏しい資料から個々の言語の使用者の数やその知識の程度までを正確に把握することこそ出来ないが、カイオワの言語共同体が決して単一言語話者のみの均一なものではなく、バイリンガリズム、マルチリンガリズムを含む複数の言語の話者を含んだ複雑なものであったことは疑いない。そして、そのような適応方略の最後の段階として、カイオワは19世紀に英語と接触することになるのである。

4. カイオワの英語化

カイオワの英語との接触は南部平原において始まり、メキシコのテキサスからの撤退（1845年）を境にして重要性を増してきた。スペイン語の場合と同様に、テキサス地方の入植者に対する略奪の際の捕虜の獲得により英語を理解する者がカイオワの言語共同体の中に加えられた。またアメリカ人（政府職員や軍人、商人、キリスト教宣教師等）との接触も徐々に増えた。

1867年にカイオワは合衆国政府との間に条約（Medicine Lodge Treaty）を締結し、オクラホマ州南西部に指定された保護地に定住するようになる。それとともに、伝統的生業形態と生活様式の大半を放棄することを余儀なくされた。政府職員や商人との交渉の機会はさらに増

え、キリスト教宣教師も保護地での布教活動を始めた。全寮制のインディアン学校が設立され、子供たちに英語と西洋文明の知識と生活技術を教える脱インディアン教育がなされ、強引な文化変容促進政策が実施された。(Mayhall 1962)

インディアン諸部族のオクラホマ保護地への収容は、カイオワをはじめとする多くのインディアン諸部族にとって、相互に接触する機会を増大させた。またインディアン学校に送られた子供たちは、学校で他部族出身の多くのインディアンの子供たちと混じり合うこととなった。さらに、ドーズ法 (Dawes Act, 1887) とジェローム合意 (Jerome Agreement, 1900) の成立により、オクラホマのインディアン保護地は非インディアンの入植者にも「開放」されることになり、土地の私有化が始まった。その結果、土地を共有するインディアンだけのコミュニティは失われ、オクラホマはインディアン諸部族とアングロおよび他の諸民族が雑居する場所へと変化していった。カイオワの他の諸民族との接触機会は一層増大した。そのような状況で、英語がアングロとの意思疎通の手段としてのみでなく、新たに他のインディアン諸部族と交わる際の媒介言語としても使われるようになった。英語だけで多くの諸部族とのコミュニケーションが可能になったのである。

その後、1934年のインディアン再組織法 (Indian Reorganization Act) の成立とともに政府のインディアン政策は転換し、インディアンの自立の奨励、部族政府の設立、部族共同事業の容認と支援等を重視した。緩やかな自発的な同化を目指すものになった。1950年代には部族の壁を越えた政治的結束を目指す汎インディアン主義の運動が始まり、さらに1960年代の公民権運動以降は、先住民の権利と土地回復を目指す法的闘争も連邦政府を相手に活発に行われるようになる。同時に、黒人や移民等の少数民族集団の間で高揚した民族運動に呼応して、新しい「American Indian」エスニシティーが強調されるようになる (Oswalt & Neely 1996)。これらはみな個々の部族や特定の地域のみに限定されない全国的な規模の政治的運動であり、そこでは英語によってコミュニケーションが媒介されていた。

この期間のカイオワ言語共同体の変化は、均一化と英語の優位化という二つの方向によって特徴づけられる。インディアン非インディアンを問わず、英語が北米大陸のリング・フランカとなり、かつては部族間交渉で重要な意味を持っていたインディアン諸語の知識は、英語の持つ圧倒的な力の前に有効性を失ってしまった。その結果、カイオワ言語共同体の構成員の間からマルチリンガリズムやバイリンガリズムが消え、徐々に英語のモノリンガリズムが顕著になってきた。それとともにカイオワ語の話者も確実に減少している。今世紀初頭には、部族のほぼ全員がカイオワ語を理解していたと推測されるが、1940年代になると英語がかなり普及し、カイオワ語の衰退が始まっている。Crowell (1949) によると、老人層はカイオワ語のみを日常使用しており、人口的に最大多数を占める中年層ではカイオワ語と英語の二言語併用が見られるが、若年層の間ではカイオワ語を理解することはできても日常的に使用しないという者が増えてきていた。

現在では、英語が日常生活のほとんどすべての領域で使われ、カイオワ語を話すのは一部の老人のみに限られるようになってきている。カイオワ語は、言語共同体の中で安定した二言語併用を形成することなく、英語によって代替されてきたのである。ときおりカイオワ語を若い世代

に教えることが試みられることはあったが、活動はいつも小規模であり、目に見える成果をあげて定着することはなかった。カイオワ語がエスニック・シンボルの地位まで高められることはなく、政治化されることもない。近い将来、カイオワ語が消滅してしまう可能性は非常に高い。

ただし興味深いことは、カイオワの英語使用の中に伝統文化の特徴がかなり色濃く見られるということである（高橋 1985）。カイオワ語は独立したひとつの言語としてよりも、むしろカイオワの使う英語の中に、ユニークな音声的、文法的、意味論的、および語用論的な特徴として残され継承されていくように思われる。

5. 結語として —— 言語と民族アイデンティティの問題

民族アイデンティティというポストモダン的な用語は、過去のカイオワ部族組織の結束性に言及するには不適切と思われる。本稿で検証した過去3世紀の間、カイオワは決して民族的に均一な集団ではなかった。それは、内部に出自的にも言語的にも異質な下位集団の存在を許容しながら、政治的一体性を作り上げた連合体のようなものであり、状況に応じて他の部族とも緊密な同盟関係を結んで行動をともにするというきわめて柔軟性の高い集団であった。カイオワという部族は、決して共通の民族アイデンティティをもってまとまった組織境界の明瞭な民族集団ではなく、政治的な提携縁組み（affiliation）によって結束したゆるやかで開放的な集団であったと考える方が実態に近いと思われる。提携縁組みは、現実的で功利的な判断または冷静な政治的計算に基づくものであり、根源的な感情に基づいて出来上がるものではない。そのような状況では言語の選択と使用もまた同様に現実的で功利的な判断に基づくものであったはずである。したがって、カイオワの社会においては、言語が特別に高い感情的負荷を持ち自らの結束性を表す象徴としての地位を占めていたとは考えにくい。

カイオワの組織境界と民族アイデンティティの明瞭化は、むしろ外側から合衆国政府によって与えられたと考えられる。それまでカイオワと一体となっていたが異なる言語を維持していたアパッチは、カイオワとは別個の部族として切り離して取扱われ、別個に条約に署名することを要求された後、別の保護地が与えられている。またその後のインディアン政策は、基本的に部族を単位として施行されている。個々のインディアンは部族毎に登録され、部族毎に異なる権利を認められ、異なる待遇を受けてきた。合衆国政府の政策は、明瞭に定義され区分される民族の存在の仮定の上に成り立っているといっても過言ではないだろう。それは、インディアン社会の現実に基づいたというより、当時の西洋社会の政治的常識を反映したものであったと思われる。

個人に焦点をあてて見た時、今日のカイオワの自認の問題は非常に複雑であり、複数の重層的なアイデンティティの併存が見られる。まず会員登録により法的に認知された地位である「カイオワ」とともに、「Black Legging Society」や「Gourd Clan」等、部族内部の儀礼集団への所属も個人にとっては重要なアイデンティティの拠り所となる。儀礼集団は互いに互恵関係にあると同時に競争関係にあり、個人がどの集団に所属するかはカイオワの部族内の人

間関係に重要な意味をもっている。また、部族間結婚が一般化している今日、双系の出自で個人の民族的アイデンティティを判断することも頻繁に行われる。その結果、同一個人が二重三重（時には四重）の民族アイデンティティを持ったり、同じ父母から生まれた兄弟姉妹の間で民族アイデンティティや部族登録が異なっていたりすることも珍しくない。時には人生の途中で部族登録を変更することさえあり得る。

また今日でもカイオワはカイオワ・アパッチと親密な関係にあり、コマンチとのつながりも深い。そのため、アパッチを自分たちと同等と見なしたり、南部平原三部族を一体の集団と考える慣行がしばしば見られる。

このような部族的レベルのアイデンティティと同時に、北米大陸の先住民に付された総称である「インディアン」も重要な民族アイデンティティのひとつのレベルを形成している。特にアングロ等異人種との交渉の場面や、汎インディアン主義の影響が強く及ぶ政治的な場面ではそれが強く現れる。最近では、全国的なメディアや政治的なコンテキストで「ネイティブ・アメリカン」という語が伝統的な「インディアン」という語に代替されて用いられることがよくあるが、厳密にはネイティブ・アメリカンという語は、アラスカ・エスキモーやアリュー人またハワイ等の太平洋諸島の先住民も含むという点でインディアンとは意味が異なっており、それゆえの反発も見られる。日常生活の中でインディアン自身が普通に用いる言葉は、やはり「インディアン」である。

上述のような重層的なアイデンティティが見られる中で、カイオワという部族的レベルのアイデンティティだけが特別に重要な意味を持つということは見られないし、登録部族レベルのアイデンティティへの固執は、南部平原インディアンのおかれた状況を考えると、有効性を欠いた非現実的な適応方略になってしまうだろう。

今日のカイオワの状況に応じた柔軟で重層的なアイデンティティの持ち方と、彼らが過去の歴史の中で示した政治的な適応方略との間には、明らかな一貫性と連続性が見られる。したがって、彼らの言語共同体の英語化という現象も、一方的同化と民族の独自性の喪失の過程として単純に解釈してしまうのは妥当性を欠くだろう。カイオワにとって英語の受容は、3世紀前に大平原地帯に進出して以来の、政治的適応を求めている耐えざる主体的な努力の一環であると考えの方がむしろ適切であろう。

カイオワの事例は、受動的文化変容を過度に強調した英語化のモデルがすべての社会に当てはまるものではないということ、また国民国家モデルに基づく民族アイデンティティ解釈を先住民社会を含む他の社会状況に拡大することは問題の本質を見失わせる危険性を持つことを示唆している。世界の民族語が多様であるように、英語化の過程もまたその民族アイデンティティとの関係も決して一様ではなく多様である、ということを経験に入れて問題を考えるべきであろう。

参考引用文献

- 青木晴夫 1979 『アメリカインディアン』 講談社新書。
- Crowell, E. 1949. A Preliminary Report on Kiowa Structure. IJAL 15: 163-67.
- Ewers, J. C. 1980 (orig. 1955). The Horse in Blackfoot Indian Culture. Washington, D. C.: Smithsonian.
- Gumperz, J. J. 1962. Types of Linguistic Communities. *Anthropological Linguistics*. 4 (1): 28-40.
- Hale, K. 1967. Toward Reconstruction of Kiowa-Tanoan Phonology. IJAL 33: 112-120.
- Harrington, J. P. 1928. Vocabulary of the Kiowa Language. BAEB 84. Washington, D. C.: Government Printing Office.
- Hymes, D. 1972. Models of the Interaction of Language and Social Life. in J. J. Gumperz & D. Hymes, eds, Directions in Sociolinguistics: *The Ethnography of Communication*, pp. 35-71. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Jablou, J. 1955. The Cheyenne in Plains Indian Trade Relations 1795-1840. AES Memoir 19.
- Lewis, O. 1942. The Effect of White Contact upon Blackfoot Culture, with Special Reference to the Role of the Fur Trade. Monographs of the AES No. 6. University of Washington Press.
- Mayhall, M. P. 1962. The Kiowas. Norman: University of Oklahoma Press.
- Mooney, J. 1979 (orig. 1898). Calendar History of the Kiowa Indians. BAER 17. Washington, D. C.: Smithsonian.
- Oswalt, W. H. and S. Neely. 1996. This Land Was Theirs: A Study of North American Indians (5th Ed.). Mountain View: Mayhall.
- Takahashi, J. 1984. Case-Marking in Kiowa: A Study of Organization of Meaning. Ph. D. dissertation. City University of New York.
- 高橋順一 1985. マジックナンバー「4」: アメリカインディアンの英語談話にみる伝統的プラグマティズム. 民族学研究 50 (1): 89-96.
- Trager, E. C. 1960. The Kiowa Language: A Grammatical Study. Ph. D. Dissertation. University of Pennsylvania.
- Watkins, L. J. 1980. A Grammar of Kiowa. Ph. D. dissertation. University of Kansas.